

五ノ三ノ二ノ一

5
1114



利
1114
卷

不出之同
豐也功

子心法心法心法

田喜書卷之三

田喜書

題芭蕉翁國分山幻住庵記
何世無隱士以心隱為賢也何處無山川風景因人美也問讀芭蕉翁幻住庵記乃識其賢且知山川得其人而益美矣可謂人與山川共相得焉迺作鄙章一篇歌之曰

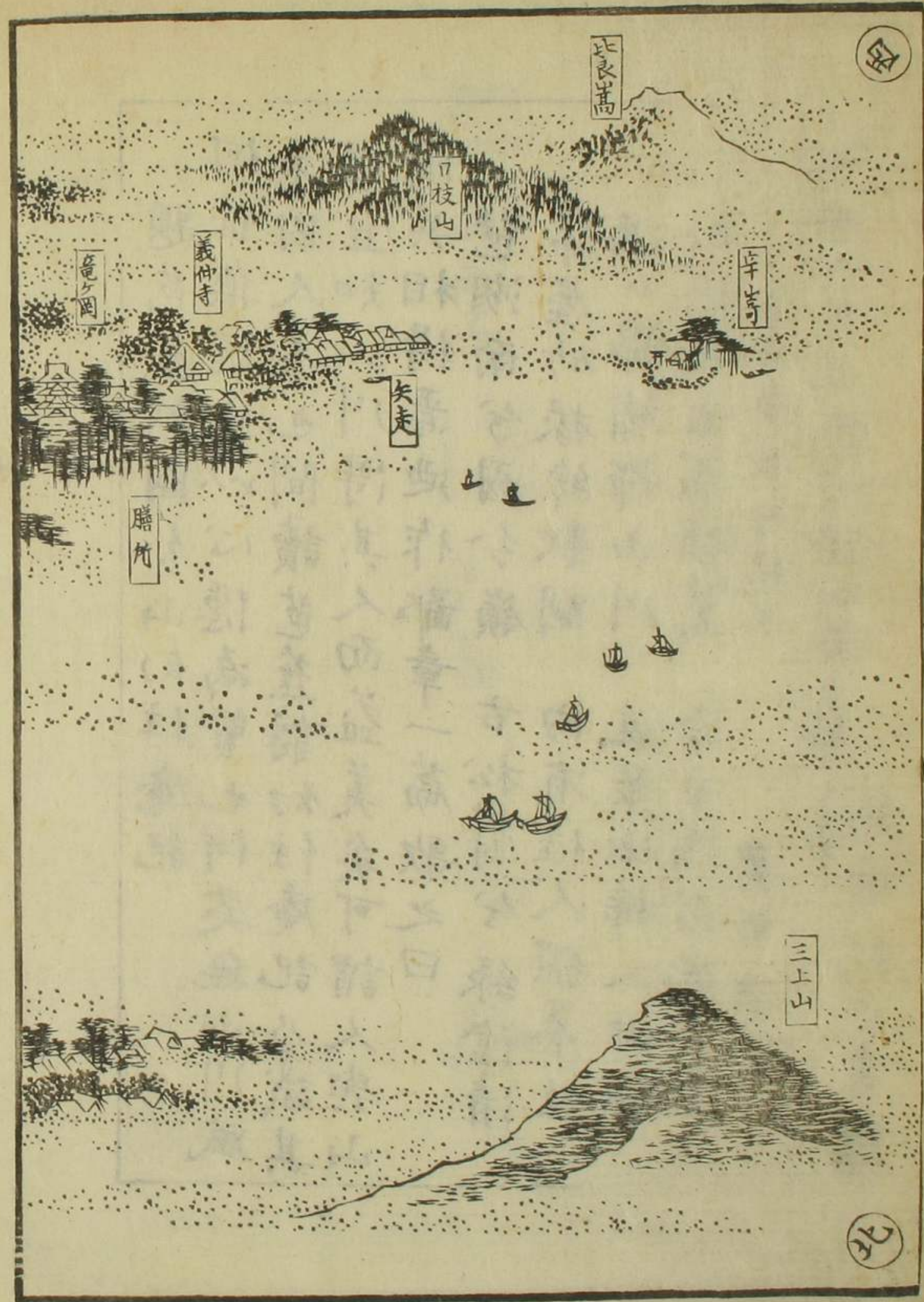
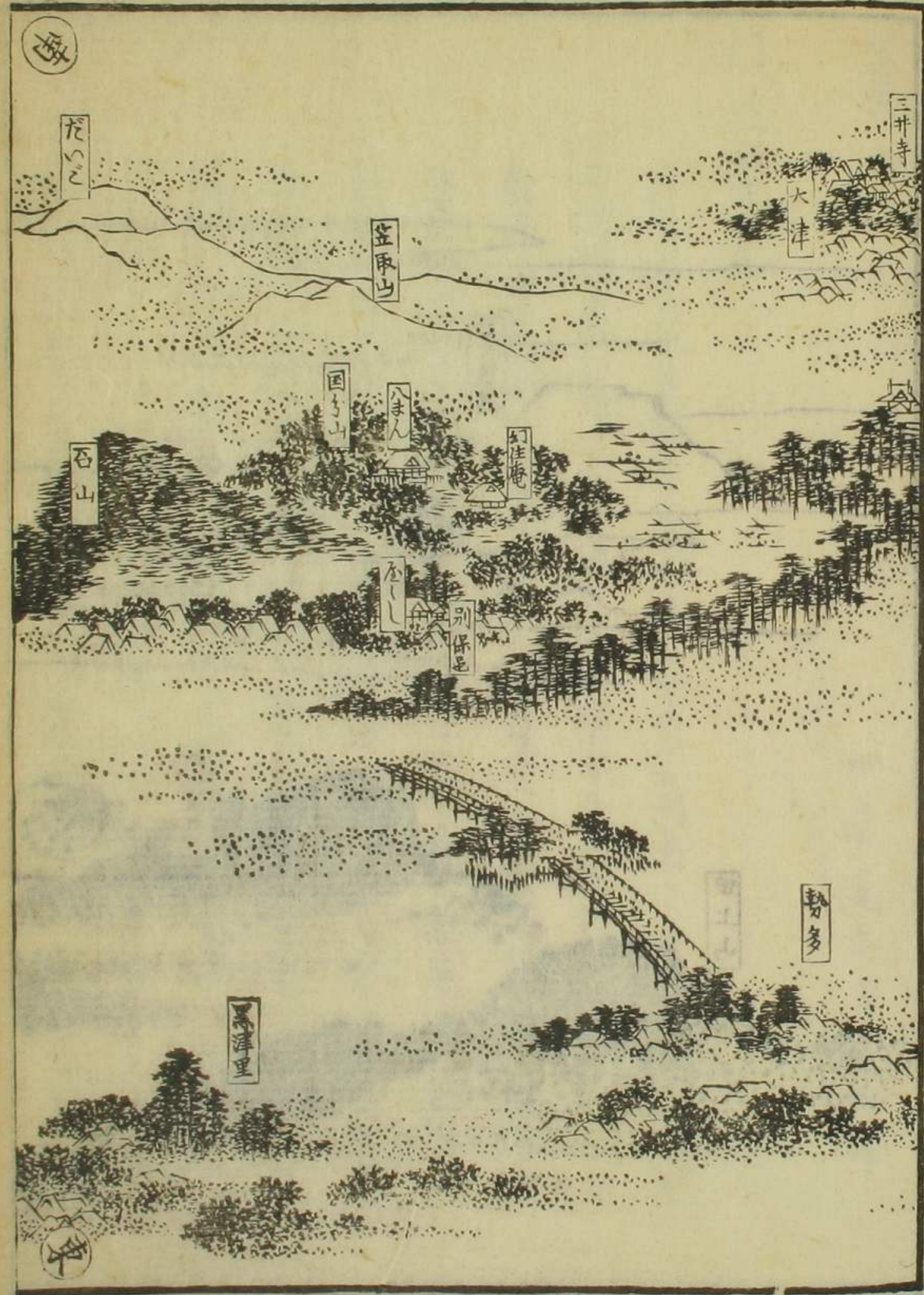
琴湖南兮國分嶺 古松鬱兮綠陰清
茅屋竹椽總數間 內有佳人獨養生
滿口錦繡輝山川 風景依稀入俳城
此地自古富勝覽 今日因君尚益榮

元祿庚午仲秋日

震軒具艸

右湖南粟津龍崗佛幻庵文章之章
筠齋紀畧書

田喜書

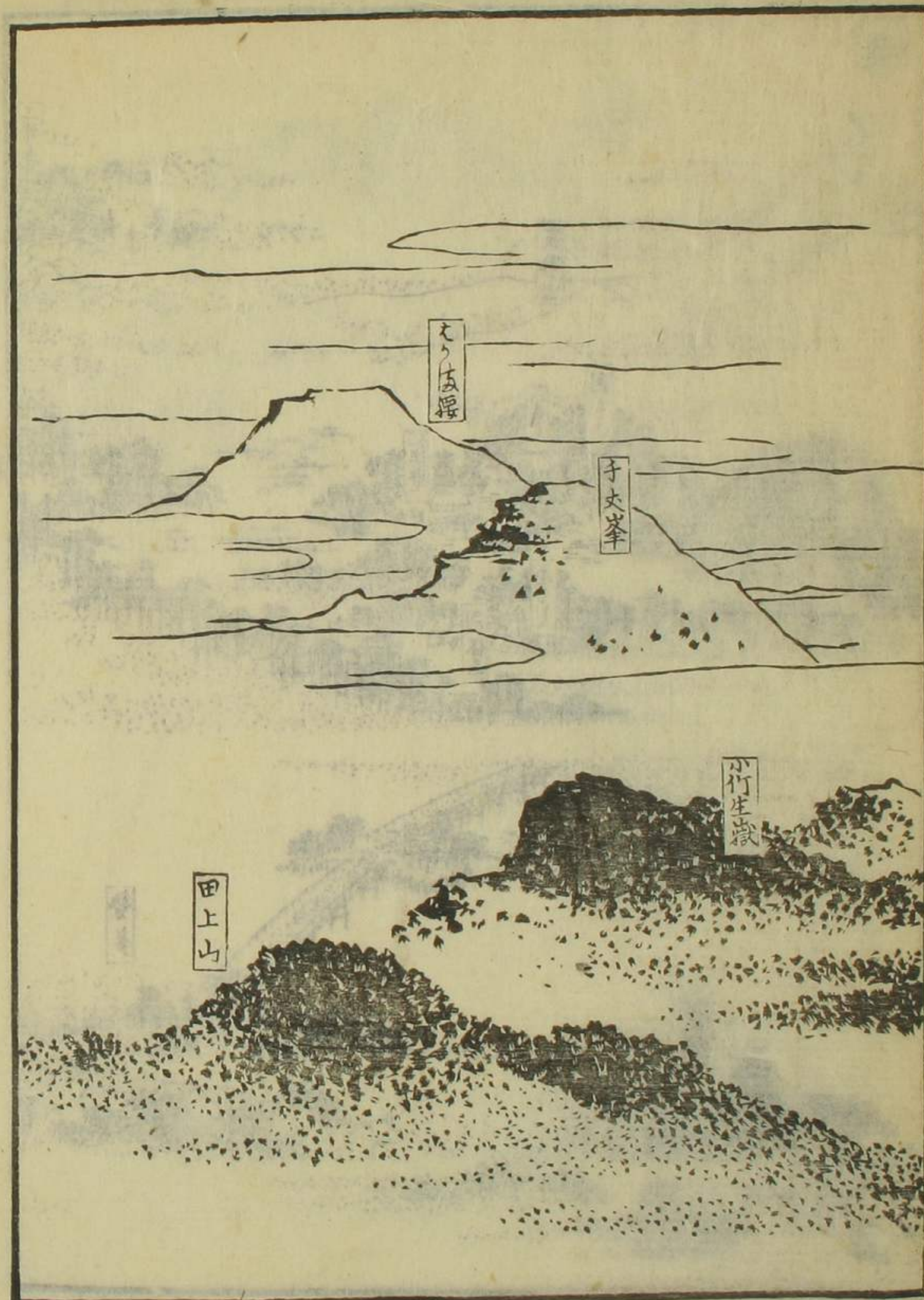


荖庵のりもと

田喜庵南溥護物輯

幻住菴記

この記は芭蕉枕書翁元録三年の夏湖南ト居の記也芭蕉居士
 ら伊陽上野藤堂某侯の家士松尾与左衛門宗行の子トて幼名
 金作右甚七郎宗房ト云兄を羊庵ト云家を嗣ト正保の初ト
 生也主君の早世ト遇て寛文六年の頃道母薙髪ト此村季子吟
 と師トて風雅の一件を以常ト老莊を愛ト佛頂禪
 師ト謁トくもト々々参禪を事ト以東漂西泊トて東武
 深川の草庵トかくはトまひ水火の難ト苦ト先トま
 一ト以古ト々ト歸ト終ト元録七年戌のあす十月十二日摺陽
 浪花花屋ト旅亭ト卒ト以遺辭ト依ト骸トを江南義



仲寺の蔡る續扶桑隱逸傳枯尾花芭蕉繪詞少く
〜ス〜ス

題号 幻住菴記

江凡石山の奥國分山は岡居の折の記少く、たゞかくは、
二つも、そのつり、の和漢文藻云幻住菴の記と云もの三通
有記と賦との差をあ、り、其翁と年四十七宋の時也と
更按世説い、さ、遠、と奥羽行跡ハ元録二年マて四十八宋也
幻住菴の山居と曰三年午の夏マて四十九宋あり、也、奥
の細道は旅の物をさも、り、や、ま、は、り、長月六日ハ、あ、り、と
伊勢の迂宮お、り、ん、と、又舟を、あ、り、と有和漢年契ハ元録
二己年伊勢迂宮と有スこの記中ハ五十年ハ、近き身ハ、と
奥羽象潟の暑さ日ハ、面を焦し、と何もハハ、奥、行、跡、の

後お、り、て五十宋の葉のりか、ま、と、四十九宋ハ、叙、し、形、ハ、幻住
庵ハ、瀬、田、と、石、山、寺、ハ、中、程、ハ、標、石、有、り、ハ、丁、程、有、り、
其舊、跡、と、つ、と、存、在、せ、り

庵 叙名曰草以為圓居曰菴菴菴也以自覆菴也

記 説文曰疏也疏謂二々分別一記之鷹カ云記者以備不忘

蓋叙事如書史法也叙事之後畧作議論以結之廣韻曰

記誌也と、史、記、日、記、の、類、を、云、事、を、其、終、マ、つ、ね、て、述、マ

を記ス、ハ、云、也、長、明、毎、名、抄、ハ、假、名、と、の、か、り、哥、の、序、ハ、古、今、集

假名の序を、本、と、日、記、ハ、大、鑑、の、大、と、習、ふ、と、云

石山の奥岩間のうらや山首

けしめ其住居ありて住る大いそりを述べてこの記の
大概を述るる序文也石山の奥と云うは、いかゞ初より云
下まてを云来登りてきて登詰り石山のうらや山首の
山ハ湖水才一の風色を統て近江とも云登りてかくと云
を人の懐と云はらんやうつハ近江と云と石山と書出さる
と又面のもやうして書出を考る也この記式は六十帖を
述るるもけしめをいふは是れ其合しつゝの段借也
岩間山正法寺江加藤加賀郡元正帝朝越天徳義澄處立
本尊于手觀自在西國順禮才十二番巡拜所也事盛衰
抄草山集才五子詳く

石山よナリてその奥や秋の空 蒼君

尾張

三日月と石山寺のうらや山 木人

下総

石山やそのうらや山 青岐

江ナ

蟬かゝや坂ともつゝぬ岩もさ 雨篁

國分山と云ふそのうらや山寺の奥を登りて

國分寺ハ聖武帝の草創也今禪廢して跡のみ也只云ふ
山の奥のうらや山寺ハ村中ニ安置して別保の
系師佛ハ村中ニ安置して別保の
系師と云。續日本記天平九年詔曰魯國令造釋迦佛像一軀
挾持菩薩二軀兼令寫大般若經一部同天平宝字四年
天平應真仁正皇太后免明皇后崩云天平國分寺太后所勸也云
。元亨釋書以天平九年詔為國分寺權輿

凌育や田々くまの寺 下毛 星谷
 雪の日や湖水を北の園に寺 江カ 春光
 ちちも勢昔を月おふ 豊前 萬居
 去る鳴鶯を川園に寺 田及 禾木
 木もさむ 柳哉 杜蒸
 活葉のく子 野格
 林鹿 鹿
 三曲二百歩 三曲

爾雅曰山未及上曰翠微九山遠望之則翠近之則翠漸
 微故曰翠微。同疏曰未及頂上在旁波陀之處曰翠微
 一說山氣青縹色故曰翠微也。公羊傳註古六尺為步三
 百步為里。砂竹抄曰一步六尺四方也。茶只曰跬三茶

兩足曰步日本法三尺八寸四方周二尺日本六寸四方也。三曲
 七曲九折 云曲
 八幡宮もせぬの神体も 弥陀の 像 の 唯一
 の家も 其 忌 ある 事を 両 部 光 を 和 も 利益の
 慶 も

八幡宮を國分村の生土神也近津尾八幡宮云。諸神鎮
 座之記曰山王七社之聖天子者八幡大菩薩也乃至本地阿弥陀
 如来也。冷海志曰近江国滋賀郡聖跡八幡一御兼八幡大菩
 薩者今聖天子是也唐老僧取聖天子者阿弥陀八幡大菩薩
 之分身云。山王七社之中三神真聖天子唐老僧取本地
 阿弥陀聖跡正哉吾勝尊法号八幡大菩薩

東見記曰日本神道有三種一云唯一宗源唯一之二字二條
院御時雖曰加之但吉田兼延如之以為得其實也二云兩部
習合三云本跡緣起此是社家者流禁中謂之曰下祝隨
役此外有天子之神道此神道者知之者秘而不言羅山
先生耳語而相傳焉曰理當心地神道也。唯一宗源古來所
傳統一而不雜者也。兩部習合自最澄空海始云。兩部
習合弘法傳教慈覺智澄。佛法附會神道以胎金兩
部配于陰陽以佛神為同一體者也。玉勝間搦の落葉の
二云天下の神社のうち神人のつくる社を俗に唯一といふ
法師のつくる社を兩部と云又兩部神道と教る一亦これに
兩部といふ佛の道は密教の胎藏界金剛界の兩部と云ことを
神の道は合せざるを要す習合の神道といふこと此兩部を

以て神道は合ざるなり也此の字もてんは神と
佛とをけりといふ兩部は秘人さへ又唯一と云は密教神道と
云との有つて其兩部をすへさばよき事と
神の道は唯一といふもよくはしりまう其名は兩部神道有
てのほむまはよりの名を兩部といふ人多くはつて天人
唯一の義といひかきりいへり
○老子經和其光同其塵。和其光同塵。結縁のまうと云
といふ謡曲もまうと云
曰比る人の訪てさるる色といふかきりも
志のうまも傍に侍てて一草の戸のさき蓮根
無射をのこる屋根もて破る落て根程外と云
をばらんと

日ころハ人の訪てさうらまはるるを根より堅固
 と云ふ勢自法は破産のさしづきとて出さるる
妙古今 西行
 昔住人跡ありき草むらさきの月のかき
 〇癸心集に「のち仇なきをすむる」云々
 多代人の橋家かあるは破産の両よくぬ
及系根根改
 胡寺の朝の椿をハ州のきくはき瓶のふりてり哉
徹筆はゆ
 入すまてうのむきをぬ古まの程のくつ
 たくこりおまじりのあるはくつ世を道もてさ
 く家よかきんくおり山下をふく先と
 幻住庵よりあるの僧何系ハ勇士菅沼より
 曲翠子の伯父か人けりいまハハと勢はる
 昔よ来くまはる幻住老人の名をのこ跡を

大もよう草菴のさほよりまての一派をく幻住の
 ニ子とんはつてさるる〇曲翠子の膳所本田侯の家主
 あり菅沼外記に依譜ハ芭蕉翁の門人也幻住老人ハ
 同家中本多八郎左王門探山居士六十七才卒曲翠子の伯父
 毛〇韓退之曰士之行道不得於朝則山林而已山林士之所
 獨善自養而不憂天下者之所能安也
 予たこの市中を去る十とてさるるのさしづき五十年
 中、ちりこ方ある中の善く失はぬはの家をた
 たりまこる

續隠逸傳芭蕉翁傳曰後遇不幸頓懷出塵志道世斷髮
 延宝六年の頃より三十六歳より道世といふ
 四十九歳の時かまて五十年やちりた身と前の十と

三つと云は結しきもあしこの虫は牛ふらふまき結するを
つらむ世をのらきいて一不任の人をもちよふ。枕草子
さう虫とあたまを鬼のくくさきナ 枕を似てさきもあき
一さくら地を何じん。古今注曰採蘭雜志曰結草虫一名木
蝶一名義衣之入或云一名結華好於草末折屈草葉
以為巢窟、雪こ有之

寂蓮衣集

秋の虫はさうと云葉も落果一はくさるるさ枝のさうり
正

ま本集

因家を出ぬんおあきつさうと云葉も落くもつらむ世に

この虫は葉山のすてりふあきり
この虫はさうのくさるるもさ枝のさうり
重泉
完来

みの中は葉も落るほははら
庚辰 乙二
一具

葉虫のゆらあつせんさるの
武花 多代女
青隠

さうかや花の何もの
倍法 湖山
富女

さうかや花の何もの
下毛 月圭
菓丈

さうかや花の何もの
江戸 砂粒
阿志

さうかや花の何もの
柱哉

奥羽象海のつらむおあきつさうと云葉も落くもつらむ世に
あゆむらふ北海のつらむ鐘を敲く

くまのりしらの由垣牛の事あるニツと述る又後ある

風塵光俊の石浦の事ありて述るはゆりてをいふ事ありて

○嵐の園より約五里親志の風の聲を聴て市振の愛を待結

九十余里海をのぼ還りて其日砂を焦りて月波荒て

いとむいりてきあつて夏細道は江山水陸の風光教を待

てと東海の方すをせむ又嵐の聲を聴て越後の地す寄

をいひて然る越中の園市振の雲よりわらわら

六つ湖水の浪をきくは鳥のこゝろ草の流をきくは

水魚をきくは一もふりうけまのこゝろ新橋を待ては

恒根結と人かゝりてお月のはめりて後とめりて

山のやうに出りて人かひいそぎぬ

この一役は草塵をきくは風塵をきくは人かひいそぎぬ也

恒根結も石壁からと云ふ勢をたしむて人かひいそぎぬ

め石山の奥に書出りて合しては

新改家集 子かひいそぎぬは草塵をきくは風塵をきくは人かひいそぎぬ

夫本集 方丈記大なる世をよむは初時かひいそぎぬは

いまして五とせむは

桔玉集 恒根結も石壁からと云ふ勢をたしむて人かひいそぎぬ

湖のりて東海をよむは初時かひいそぎぬは

山をよむは湖をよむは千鳥うた

早乙女のみけりて湖をよむ

くまのりしらの由垣牛の事あるニツと述る又後ある

くまのりしらの由垣牛の事あるニツと述る又後ある

近江

伊勢

同天

如賀

虚白

菊所

珪子

木雄

山青の湖水よおつる柳くれ越後 東菰

くつゝ川標や舟もつ湖の上、越後 畦堂

夏木立片もゆるき序のく信奥 天涯

つゝゝ湖水へ入ぬ渚安房 斗山

くつゝく影にまほしく松尾の燈上毛 哉児

日の入や湖水の先紅を木立江戸 鶏周

湖へくつけのゆるゆる尾元うね江戸 雪芳

くつゝゝいぬるあまきり三津人 吐山

酒のゆるる日ハ歌ももぬ浮葉が三津人 三津人

植田まてくた果もた恒丸 恒丸

山かけや董ひきけ近江 卧鵬

くつゝ果まで勢ふあまきり近江 草也

村の果あゝや浮葉ま越後 田都喜

序の果あゝ松かけ江戸 守口

草ふくや序の江戸 一身

くつゝの女春の志跡江戸 一鳥

ねまうくえほ江戸 一鳥

かゝうくえほ江戸 一鳥

かゝうくえほ江戸 一鳥

かゝうくえほ江戸 一鳥

かゝうくえほ江戸 一鳥

かゝうくえほ江戸 一鳥

かゝうくえほ江戸 一鳥

かゝうくえほ江戸 一鳥

かゝうくえほ江戸 一鳥

かゝうくえほ江戸 一鳥

かゝうくえほ江戸 一鳥

かゝうくえほ江戸 一鳥

みづのにおもて涙をうそくまらぬ

秋成集

夏をしのびてよよめるるきんあふくきんわふくらん

〇檀鳥とうもろぬものゝ又鶯のふりて宿かゝるるも

いそぐ

辨古今 後成

辨古今のそとこもきんあふくきんわふくらん

山家集

山家集のそとこもきんあふくきんわふくらん

駕舟の酔さめうははははは

舟の老ふかたあはははは

山柳やうつら合はるる山柳

一と休のらん先くうふちた気

柳くうあはははははははは

逸水

後の家京へ三里もまきくわ

ふちのやまはははははははは

水の水のうつらあはははは

坂をしのびてよよめるるきんあふくらん

山幸や門を出入りし時

昔よよめるるきんあふくきんわふくらん

冒険家集そとこもきんあふくきんわふくらん

鳴りしけの昔もはははははは

屋の枕をよの幾さや杜鰲

杜鰲さあはははははははは

因葉あはははははははは

鳥羽音のうらるる梅もははは

一枕

可厚

栗三

藏六

十丈

岱音

揮良

万里

杜来

雪翠

子規かけし鳥啼ぬるまの形相召 又也
 こゝろもく啼く仕音のや杜鵑下録 林風
 かゝ来亭のやそはる山 三鴉江戸
 二のあゝハ亭かゝ水ぬ蜀鬼 山峰 雪濤
 時多ふくや降田の道ぬ 鶯笠
 おゝ盡たさく志まはる鳥野 鶯笠
 本つゞや何の味ある山本系 關更
 本 咏多や柳さくもおと斗 吐月
 子けさのほろの松を体さく 相插兵庫
 本 風多はるけりやねの若 里濱女武蔵
 子けさのやけり水さく山江戸 文口

菟兵楚東南よそ一子月ハ滿湘洞庭よそ月

山々之法一申よそさくち人家さく程子屋さく
 南薰峰よそお詠一北風海を印さく一涼

杜律 以疾推塞在峡中蒲湘洞庭應空楚天不断四時雨巫
 峽長吹薰里風。吳楚東南割乾坤日夜浮。○この園を山ハ山城也
 江の境を也、笠取磯湖あつて東南とつともさくさくさく大
 き兵楚東南よそさく一子月ハ滿湘洞庭よそ月
 半り止観四日路遥若遠分衛勞坊若近人物相喧不遠不近乞食
 便易下暑の南薰ハ南風也家語曰舜彈五弦之琴操南風之
 詩注曰南風之薰也唐太宗詩薰風自南來殿閣生微涼呂
 氏春秋曰東南之風曰薰風

五ノハハ南風也涼一其味カ若クも

士朗

涼しきや食す物くせを

雲布

草も冬くくく水き夕き

如竜

雪いそくく水いそくくの意

清容

雪くく水いそくくの意

田美

比叡

の山比良比高根より辛崎の松を千歳とて

舊事記に日枝懐風藻に神叡山とて麻田連陽春作を

足とて傳教大師より最に珠山を定まりて東鑑

に金子山とて三代実録に大比叡神に比叡神とて大嶽を

大いえとて西塔と横川の間に小ひえといへる淡海志に叡

山者山城国愛宕郡限峯東方近江西方山城也この山を

桓武帝の勅をなすて延暦七年秋最澄山を定むるに日枝と

云くを叡慮に比るるの義を以て比叡山と改めし一乘止

観院と号し弘仁十四年額元年号を勅許有て延暦寺と賜

けはくと畧又叡の富士と云

拾遺集 けの意のゆへはゆへ物やをたのふとていふれまの

○比良の嵩もこのふとて名をおへる山也比良の大山をく云

雪の名をう

万葉集 けの意の比良の山は海に近りて雪は袖に入ん

○辛崎の松は史にこの松南北三十八石東西三十間枝四方

半の長し青羊伏魔の松もこの松のものといふ

尊朝親王辛崎の松に記すこの松はつとやの大松とて

てくはくもゆへに畧は史に新庄後泊直粒とて畧大津の内

榊廊を新庄ぬとて史に其はくく松菴東玉

雑多直壽

とてふく有り暑々の招きもよむくくやくて方の雑草畧
 風情の松をくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 めて拙らき畧于時天正十九年卯の秋の末人もぬさうく
 皆狂一々

おののけり子とせやほへ〜遠の松もさうなれ〜となくもくと
 とやゆささておせりもぬくせりつきて春をぬ指もとせり
 一日のみ〜りよてふとまの根さ〜いちたのまゆと魚有〜とく
 覚えけり〜と

春の雪は敵へのき〜の有るに はナ 寒松
 雪は雪は敵の山も〜雲々 ナ 大梅

一あり〜の枝〜の春の都り云々 ナ 巴生

春の雪は敵へのき〜の有るに はナ 寒松
 雪は雪は敵の山も〜雲々 ナ 大梅
 一あり〜の枝〜の春の都り云々 ナ 巴生
 さて春の志かろの〜の遠春ま〜ぬ 長翠
 くの遠る遠る〜や 楓堂
 幸室の〜二りも〜や〜秋の風 壽翁
 よそのも〜二度も〜く〜く〜く〜く〜 梅價
 人々〜ぬ月の出〜く〜く〜く〜く〜 掉歌
 のす〜く〜く〜く〜く〜く〜 宜彦
 水さ〜や山〜く〜く〜く〜く〜 静観
 名〜名〜く〜く〜く〜く〜く〜 弄山

鹿をくもるや静き土俵の月 下毛 芭竹
 花の影も鳩も草も色も夕暮 武蔵 有臺
 うつら日や露流る浦の雲 羅倉
 夕くらりてふも江ふらりて 梅一
 かもきりてきりてしゆる山家 光 可景
 土家もえもらるる雨ふる 確家 光 河明
 東と西とめてさるるが日影 光 白桂
 草の芽もあひのちの影をい 久賦
 株のつと橋あ葉約もはる 光 有竺とりて通ふ
 木樵のたより林藪の小田 光 早苗とくく 光 堂虎 光 通ふ
 夕雲のたより水鶴のあ 光 り 光 美景 光 の 光 通ふ
 ち 光 り 光 通ふ

城ハ藤所本田侯の居城也。橋ハ勢多の橋瀬田の長橋とも車轉の
 橋とも云志賀郡粟本郡の境也長九十七間 中七間小橋長廿
 七間 中七間 中鳥の間十五間合長百九十六間
新古今 匡居
括の板も苔むはくくちかきりて 母経ぬん流るるのそ橋
万葉九
田 ちのちの山や海ふけとるるあまの秋くはるゆ
 ○笠取山々山城磯湖の東の山也石山より一里近江山城の境
夫本集 西行
三本 ちのちの山や海ふけとるるあまの秋くはるゆ
風雅集 於基
笠 取の山や海ふけとるるあまの秋くはるゆ
 ○ふもとのお甲
山家集
 山田のちの苗もあまの秋くはるゆ

○常志のふ

拾玉集

丹井川のつぎに流るるるなまき草花のふたやうのりや

○水鏡のわくくき

山家集

桐人のくさくさのうららふ心でして菴をまわく水鏡のりや

○文選謝靈運詩序天下良辰美景賞心樂事四者難

矣古今集真名序古天子每良辰美景詔侍臣預宴

遊老ニ賦和哥云美景のりやらるるを侍り美景の中

と云

景をふふ、法をふふ、法瀬西の橋

素志

舞をまわいそくは、王城多の橋

雄啄

約曳の袖のゆるり

完爾

あふれ、の流はくはくき 湍田のり

午丸

本草のりや人のほろや瀬田の橋

駿鳥

三日月や約ふくもくもく甘き舟

宇橋

約ふのりや舟をまわく舟

卓堂

約ふのりや舟をまわく舟

菓二

約ふのりや舟をまわく舟

夜月

約ふのりや舟をまわく舟

堆花

約ふのりや舟をまわく舟

沼人

約ふのりや舟をまわく舟

一宵

約ふのりや舟をまわく舟

玄路実

約ふのりや舟をまわく舟

再行

約ふのりや舟をまわく舟

雪草

約ふのりや舟をまわく舟

松夕

本世もふあふ人梅の 餅茶 越後 蓬仙
 信人たあを進家をとよこ 上道 里丸
 三々や人のせ屋をる不苗時 素磔
 疎々々々梅のまののまの苗い 武陵
 果瀧りまのち出木切岸家 成美
 ほつたつたのまのまの 保吉
 とつたつたのまのまの 申吉
 膏くのまのまのやけの杭 か賀 羊猪
 々々形々まの山流のまの 越後 鯛堂
 波の濡くまのまのまの 因又 草堂
 毛流のまのまのまの 近江 志了
 岸のまのまのまの お模 白吟

萩の流花雪をのまの 江戸 荷乙
 山草花流のまの 江戸 玉芳
 膏雪花流のまの 江戸 梅夫
 岸のまの 加賀 菊塙
 子を棄る萩の何ちの 越後 風芝
 毛流のまの 伊勢 石海
 田よのまの 信濃 昌作
 水鶴なく東の 江戸 叢
 雨二日水鶴も 江戸 一司
 水音を 江戸 草雅
 中ふも之上 江戸 古き
 古き 挿も 江戸

三上山一名百足山山の形富士に似たり近江不二と云。三上社
麓の三上村に有祭神天御影命。鳥丸光榮御東路紀行
古くもやと云ふ所ありしと云はれりやと云ふ所の山はかくも
不二御覽の記 堯孝法印
切りし不二の根を付をちのくまかふの山の傍に
。武藏野の古き拙くハ續隠逸傳后到武陵造廬於深川
植芭蕉一株終為菴名奥知道去年の秋江上の破屋に
鮎の古巢を抄ひてまゝに色もて深川の草庵をけりし
かりしといへどもはあり

五月庵の目庵うづりや三上山 美知長
稲のまよかきやうのぬいしんく山 月居
雪もつて不足りしや三上山 啓山

田上山の古人をかき

早苗ころ中ふくまきくしんく山 武蔵 史接
いしすしや押さやまのぬいしんく山 春路
五葉十二
井六帖
○方之記栗津の系を分て藤丸の記を弔ひ田上川を
て懐丸の墓を考つぬ。毎名抄り人の言たうくは下
そのうく云ふはつと云ふ懐丸の墓有るの傍にてこの
券子のもつれと云ふ人志也。深草元政の草山集懐丸
を美う旧跡を尋る記の中より勢多の橋より南に入山中松下を
出大日山に至り黒津より田上川を渡りて関津を過大石を
つゝの橋をさすりし橋をさすりしはつと云ふの言はるるの

くく路を鹿死と云百谷山をこえて岩津村にて勢
多なり二里余り也この村より一里許りに信丸の祠を祀す
信丸の山嶺と名づく信丸の死とて有ると云喜撰も宇治
来りて字をよめりて云△この穴石山より入り岩津村
にゆく信丸の峰をもちぬへ△長明の古くをもち
てく田上川をよめりて流るる一説信丸がまゝ田上川に
田原の禪定寺村の東奥山田に宿す云山城近江の国境に
て江加戸塚邑へ出るこゝに信丸の塚と云○田上山の麓に
俊頼の古くありていつく人ゆき○貫之祠本と云○の宮志賀
山の下樹間に有正光寺村に属するといふもいふやと云
月影のつらあつたり世々ここに宿すも貫之の祠と云○有
くく文と云と云○黒土社貫之社の志賀の祠と云

園城寺北土主より陰陽形

田上のあつて心そくや山もさち 江ナ 飄質

田上くわつる日影をばく 野 野性

そくくくも雪くくくくく 下毛 冷水

田上ハ心くれもくくく 下毛 月丘

はくわく嶽よりより峰嶺 下毛 嶽と云山は馬津の里ハ
いふと云くく 下毛

小作ヤちチ嶽ノ幻ニ住ス房ノ東ノ方田上山ノは 也

名寄集 後九東院 田くくノはくわくノもくく 也

千ノより峰ノハくノ房ノより 也

○

つらつら川より西の方よりおとほくさゆ

○尾はの里ハ隆多の真田上山の林かき石山より湖水を

履して向也琵琶湖の水黒津石山の石をへく岸治川へ

流るゝ古きより一里の名は治兼保元元弘應仁の乱

の折くも度く合戦のりきりまをくも地所も上尾は

下尾津とちちてむ度く田上十八のうち也

奇牒二十三 原俊重

日 原俊重 一 尾はの里をかきよりうね

右二首田上にて問答の歌と有はるも田家にて葉集と云る

席ののこ。方丈記はくもをみて夜の床も

まゝまの白く量りや尾はの捕見々時

下尾 士 静齋

吹尾はの砧さくえり

江戸 素由

鴨かやく尾はの里はちかき

悪長

つらつら川より西の方よりおとほくさゆ

この一章黒津の細代の歌万葉集よりえんてさは

穿鑿むつり諸子稿をくくつらつら古代の萬葉

集よりその説は尾はの書いきて尾はの人か

考るは此章のよきこと尾津の里は尾はの

切てきてつらつら川より西の方よりおとほくさゆ

尾はの里は尾はの書いきて尾はの人か

考るは此章のよきこと尾津の里は尾はの

切てきてつらつら川より西の方よりおとほくさゆ

尾はの里は尾はの書いきて尾はの人か

考るは此章のよきこと尾津の里は尾はの

黒津ハ宇治川の上の口をまはして宇治川の景色を
かき用ひらまき法あり一宇治川を湖水の末
く勢多田上橋谷を先くまで宇治入る也

拾玉集 慈法
鳳てるや橋谷より滝津波も花さく宇治の川より木

六巻もみちの記歌万葉集も宇治の細代の哥有

万葉集七雜
宇治川にゆくせきく一川の人みちよあり遠近さく申

全
宇治人の事く(の川)の身あまをまは君とてついでさくも
西行家集

羽更よたけりふも風流ぬ田上川より流うつらん

まゝ黒津ハ田上十八のうちまは田上川より川を拾遺集

よよと堀川百首より木を田上よきもまは万葉集の

すくくやまんを付まは彼是の川用化らまきりもむ屋

あやや田上思津日一宇治川の流さあまきいとさく

志けよてく一切の川より大言もく二体のく一さくは

魚一美葉は黒津のうらうら形容の程とのひぬ魚

一あても可あんなれ枝の考をまひ

松の山にゆき川よりあのかき哉 曉臺

あしろちまはくはくくくくく 五明

食くくくあまの川を細代也 椿堂

ふ筆の川はくくくくくく 雨塘

萬のまの川のさきよあり流也 柳茂

うけの川まは月や川の細代也 雪熊

松の川の流る人あまの川よりあり 雀豊

このくくを思くくくへぬ細代也 笑壺

○

何一のあふ福菓くるるをふら
信陽 乙人
大なるのまふすもやわらわ
信陽 其翠

杉眺まくまぬんくくらの峰は這登る松の棚は
くも菓の圓座をぬまう橋の橋掛る危法く

方丈記南小坂の目かきをけし出ま竹の篋子をぬまの西
小園伽棚をけし累東まへきりまのりまをぬま

蕨のわらわ種ゆけり山家集
引まけし焼押まのささひ折人ふくまをぬま

錦繡段地理之部陳元信之松棚詩定斫松枝架作棚蒼
髻如戟畫崢嶸清陰堪愛還堪恨遠却斜陽破月明

○抗別鳥窠道林禪師富陽人也見長木望山有長松枝葉繁
茂盤屈如蓋遂棲止其上故時人謂之鳥窠禪師元和

中白居易守茲郡時之友也

りの海棠は菓をいし主薄峰の菴を造へる

王翁徐佺の徒はハハハハ

山谷詩集 題薄峯閣 閣在野別 提刑司 徐老海棠菓上元注曰徐佺樂

道隱於藥肆中窠有海棠數株結菓其上時与客菓飲其間
全集王翁主薄峯菴王道人參禪四方歸結屋於主薄峯上嘗

有毛人至其間問道

唯瞻辟山民くかて了孱顔不足を投出——空山は風を
打く序は

瞻字寐也字彙今睡眠通称辟正亦切与僻同偏也只い不む

うちある山人くかて了かきめ事は早下の白ら宋書云陳搏
隱居花山不仕常喜新睡小睡年年大睡三載云○孱顔司馬
相如大人賦放散畔驥以孱顔注孱顔即嶮巖蕪載詩撰衣

步屣顔注山嶺曰嶺廣曰淮泗之間謂之嶺屣顔ガニ山
 高貌履サン説文曰疇一曰呻吟也。事文類聚捫虱論袁王搯
 隱居華山懷仇世之念植温入関搯被緼袍而詣之面談當世
 之吏捫虱而言旁若無人温察而異之。霍林玉露孫仲益
 山居上梁文云衣百結之衲捫虱白如柱九節之筇送鳴而去
 寄語也

形代了風うつゝ流りて

刈萱は居るうも去る人西風 嵐外

連翹を掃く出た舟は魚を釣 茶静

曉をさほはえぬ暮のまじりて哉 菖

いと折やと掃よやく猿のそと風 用和

温石よさくくうらむらむる哉 憑我

入也は掃く一舟の本傍宿 塵鸞

水くりにしんまめあはれ谷の清水を汲てくつゝ
 舟くくくくくの雪を掃く一舟の傍へいづの舟
 方丈記南の笠の裏をききて水を汲てくつゝ
 らたは修まよく似かたはきき住居の傍へいづの舟也
 世の舟も
 昔の舟も西の菴のくくくの清水を汲て西の上人のくくくの
 舟も昔の舟もくくくの舟もくくくの舟もくくくの舟も
 集西の舟も集あはれ舟も西の舟もくくくの舟も
 舟もくくくの舟もくくくの舟もくくくの舟もくくくの舟も
 とくくくの舟もくくくの舟もくくくの舟もくくくの舟も
 舟もくくくの舟もくくくの舟もくくくの舟もくくくの舟も

月くくくはるる岩らの昔清水汲てはくもなきはるる
もよみあひるるくさあきくこの文素の赴一妙の值へ
云いてはく一志は力わくくもくは

早川や清水水取く鞘くくく 木海

一村の流くくくくは清水 か賀 夜鹿

清水まき取の境くく山 之河 赤守

入二くく早くか子 信濃 玉蓮

くま 相模 菊社

葉 江戸 梅塙

早 其破

雪江 元盛

草の戸や薄の流く昔清水 碓嶺

くく昔はくく人のくく人高く住かーけく
まーくくかけは物取家もかー持佛一間を
層くく東はものまーくく一きまーくく
つらくくおを統業の高良山の僧ふか茂の
甲 あまの 敷子あてこの度治ま登ま、ま
くくくくくくくく額をいくくくく筆
くくくくくくくくくくくくくく
かーくくくく

方丈記くくくハ箱の恒くくく阿弥陀の畫像を安置く
出てまーくく下界くく特仏一房を屋くくくくくくくく

梅の枝は眼よしの花は〜
守光
善く〜家い〜らの花の色
箕山
このゆ〜梅のつる〜
梅壽

印はちまき〜〜ぬ人〜
何れもよまの翁里の枝の色も入来せぬの老の
福くはあ〜〜兔の豆畑か〜

農談口取亀山殿と百首御製の山のの房々

○雲谷雜詠朱梅庵野人戴酒來農談口已タ

情〜〜
燕村
〜の葉も庵ハ兔の〜

猪〜〜
舊三
兔ホウ雪も解〜
黙巢
い〜〜
天涯
道〜〜
舊尼
早〜〜
丘菟
枝の〜
与水
田〜〜
圭別
福〜〜
世南
〜
棟光
〜
迦孫
〜
五改
〜
秋朝

葉守 露谷 吐山
 子編の香の肩越風の入口に
 稿の香也日き川宿を中しり

夜座志川を待てり新をともあはれを
 ころりてハ周西は是れをあらはれ

○唐詩 夜座不厭江上月盡行不厭江上山

山家集 世の中はつたをともあはれをあらはれ

○莊子齊物論曰罔兩問景曰曩子行今子止曩子坐今子起何其

無持操典

可都里 貞松 葵亭 魯僊 大鏡 爐扇 玉光 蕉雨 田子 斗筲 希拙
 名月のおくもては深山うけ
 鮎節の鳩もあつてのくまの月
 雨乃月をくまに居るまの月
 滝之は世と月と秋とよを
 月やぬる 深山の竹をわき水
 玉光 暁の月をくまに居るまの月
 蕉雨 暁の月をくまに居るまの月
 田子 暁の月をくまに居るまの月
 斗筲 暁の月をくまに居るまの月
 希拙 暁の月をくまに居るまの月

月よりいそぐはくわむくは侍 双湖
 月影のいつもこのまはくけ侍 元堂
 月影のいつもこのまはくけ侍 古翠
 月影のいつもこのまはくけ侍 且翠
 直方より月影のいつもこのまはくけ侍 不々
 舟より月影のいつもこのまはくけ侍 乙良
 舟より月影のいつもこのまはくけ侍 素波
 舟より月影のいつもこのまはくけ侍 草均
 舟より月影のいつもこのまはくけ侍 首古
 舟より月影のいつもこのまはくけ侍 芳一
 舟より月影のいつもこのまはくけ侍 推望
 舟より月影のいつもこのまはくけ侍 東里

二日月のうけ侍兼一薄うけ 寄船
 舟のうけ侍兼一薄うけ 兼里
 舟のうけ侍兼一薄うけ 米佛
 舟のうけ侍兼一薄うけ 閑齋
 舟のうけ侍兼一薄うけ 素童
 舟のうけ侍兼一薄うけ 宗常
 舟のうけ侍兼一薄うけ 守豊
 舟のうけ侍兼一薄うけ 井眉
 舟のうけ侍兼一薄うけ 寸風

かゝいゝもておのゝ閑寂をこのうけ侍兼一薄うけ
 くさんよめいゝもておのゝ病身人よ倦る世をいゝ侍

人年似々借年月のつらき結はく
かき身の料借のききつめの時、仕官惣人年
地を借や

こまき流通の文修也山せらりてをかきん結はくは
とハ始のやくをいし人かひしをぬとをんを結く借身
人よ倦てハ更な象借を親き世を厭け人
似くハ幻住老人のそりたよりつらき時
年月のつらき時を述る市中をきき
十とせはく借。續隠逸傳芭蕉翁下
仕府主君而有忠勤借學支秀登借先禪吟公の庵從
ちりつ借耐主君の早世をいし借仕官を絶て遺世
は。お令の地ハ撰集抄武官の家よ生たものハ服の矢

をを屋くはくは三尺の紐をぬいて一陣よりそり令をく若
あかも名利の務地の存ありとそり。杜律 為農山澗曲臥病
海雲邊世已疎借儒術人猶乞酒錢借

ふ借ハ佛 雜 祖室の扉借ハ人借も
道世しては常陸鹿島根本寺佛頂禪師借参考して著く
禪室ハ入屏息三頓の修行借ハ
この時ハ鹿島記行借ハもの有きと潮来まで本間松江と云
旧友のく借ハ小巻て世をた借ハ足借ハ根本寺へ通ひ
り借ハハ松江と云ハ五十賀餞別借ハ小集ハ有借ハ五十賀
鈔借ハ集借ハ伊賀り古借ハハ集借ハ素堂借ハ松風借ハ良
有借ハ寺適借ハ哥借ハハハ集借ハ素堂借ハ松風借ハ良
瓶屋借ハ雪借ハ其角借ハハハ世五人借ハ有借ハ世借ハ有借ハ自借ハ享借ハ四借ハ丁

卯年のも也廣島の一事もその時のり況

○佛頂禪師ハ其石下野那須雲岸寺の奥に山居しての徳
五年未十二月廿七日七十六歳に入寂しりて○惠能禪
師ハ偈云吾三十而窺佛籬祖室

わらわりのふり風雪ふりたをせぬ花鳥の情を芳しく
まゝまゝ生涯のはりわらわりのまゝ終り無解無
才もくわりの一筋まつふり

○徒然草謝靈運ハ法華の華授なること風雪の思はる
耽りて惠遠法師の白蓮社に入居してわらわりの。壯子衆
生主ハ扁吾生也右涯而知也無涯以右涯隨無涯殆而已

旅すもて花七りてわらわりの。日人

春の鳥先といひ物はうらまゝ
まちまぢはあやかしやるま鹿
名もまぢなまのまぢなまぢ
新かま花の磯く山家く角
ま食よ小神くまぢまぢま
花まの娘おくらえる雑煮哉
ままぢまてまてまのまぢま
月自のらままかまぢま
花まやみひかままぢま
まのま花はまぢま
まぢままよまぢま田の目
まぢままぢままぢま

播磨 應仁
備前 泥舟
伊勢 龍草
信濃 省吾
信濃 園寂
信濃 敬高
越前 月臺
江戶 石二
常陸 菊角
下毛 詰明
越前 其翼
越前 丸未

南歌 谷雄

樂天ハ五臟の神をやふら老杜ハ瘦半り

白詩選聞亀兒詠詩憐渠已解弄詩亭搖膝支脚李二郎其

季二郎吟太苦年終四十鬢如霜。三休詩元摸寄樂天詩曰

老逢佳景惟惆悵兩地各傷無限神。良基公小夜の原光

は樂天云一人は夕あゝをばはるるせゆる故よんをらるる

若くより髪のおく白くはるるをさる。霍林玉雨踏曰

李太白一斗百篇撰筆立成杜子美改罷長吟一字不苟蓋二

公亦互相譏嘲太白贈子美曰借問因何太瘦生只為從前作

詩苦苦者譏其困瑠鑄也子美懷太白曰何時一尊酒重百細論文細林

識其文之縝密也

賢者又質のまにかさばもいつまもまを流一の

すゝのまゝにやとせしすてふ

いつまもまをら一結と始の幻位老人の老をのまをさる

とまを踏はるる也。論吾雅也篇曰質勝文則野文勝質

則史文質彬彬然後君子注曰彬彬猶班班物相雜適均之貌

先考のまを推のまをらるる其本立

源氏推々本いふる本のかゝるまをのまを推くはるんや

て累あひまをまをらるるげどとちまをらるるこえん

判つはるちよらんけらるるのまを推ももをらるるふまをらるる

万葉才七詠苗
山家集
向峰
山家集

あゝは君をまをさるるめこのめを推るまをのまを推の下枝

三都
發行
書林

京都三条通外屋町 出雲寺文次郎
 大坂心齋橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛
 同 博勞町 河内屋茂兵衛
 同 安堂寺町 秋田屋太右衛門
 江戸芝神明前 岡田屋嘉七
 同 日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛
 同 壹町目 須原屋茂兵衛
 同 淺草茅町二丁目 須原屋伊八
 同 本石町十軒店 英大助板

推の葉子境のこもまじり 公 屋為
 川上や雪のこもまじり 夏 季珉
 波もなき池のくもまじり 夏 志兮
 水ももまじり 推のこもまじり 東海
 推の葉子境のこもまじり 可笑
 解あまの西日くえい 推の家 珠弓
 雪おりの推の葉子境のこもまじり 一葉
 折の本もまじり 推の葉子境のこもまじり 後

(印)

46-11

